

# 生穂重よりする暖地麥類の 收量算出法

長崎縣立農事試驗場 { 福田健太郎  
陣野久好

麥類檢見の重要性に鑑み何等かの科學的方法を案出せんとして取敢えず本年5月～6月に亘つて天辰技師の御指導の下に本研究を進め、次の様な成績を得た。即ち小麥、稈麥に於て成熟期前當日5日、7日、10日、13日等其の熟度を異にせるものを各品種選びて作柄均一と思はれる一壟内に於て前記日數時に於ける青刈區と適期刈區とを設け、一坪並400穂の調査をなし青刈時に於ける生穂重（刈取後2時間以内測定を終る）に對する適期刈時の子實重歩合を見るのであるが各品種間に於て略々一致せる傾向を示した。即ち小麥に於ては約60% 稈麥に於ては約50%の割合を示した。而して各品種間の差違は坪刈調査に於ては最大10%内外で相當大きな開を示したが400穂の調査に於ては其の差2～3%であつた、要するに坪刈調査の差が大きかつたことは青刈時と適期刈時とに於ける場所選定の誤差より發する均一度が大いに影響したものと考へられた。

考ふるに麥類の生穂重なるものは成熟期前1週間位より殆んどコンスタントに近き變化が想像され、此れが應用場面に於て實用性ある生穂重の變異巾といふものより相當日數に達するものと考へられる。而して麥の登熟過程の判斷誤差なるものは大した影響は及ぼさないものと考へられる。

以上簡潔ながら各位の何等かの御參考とも相成れば幸甚である。